

考えてみよう靖国問題

1. 靖国神社が投げかけたもの



ドキュメンタリー『考えてみよう靖国問題』、2006年(24分)

韓国人女性の李熙子は、幼少時に父親が日本軍に徴用(1910年の韓国併合の結果)され、そのまま生き別れに。90年代になって初めて、父親が1945年6月11日、中国の広西省で戦死していたこと、靖国神社に合祀されていることを知った。「父の魂が靖国神社にあるとは思えない」と、合祀取り下げ(靈璽簿からの削除)を訴えるのだが、靖国神社側はそれを「できない」と拒否。日韓の遺族や研究者など、様々な立場の人々へインタビューを交え、靖国神社問題を浮き彫りにしたのが日韓共同制作のドキュメンタリー『あんによん・サヨナラ』。釜山国際映画祭でドキュメンタリーディレクター部門最優秀賞を受賞するなど、世界中で大きな反響を呼んだ。そのスピノフ映像。

- 亡くなったときは日本人だった。
- 遺族には知らせず、なぜ一宗教法人にしかできない靖国神社に死亡を知らせるのか。
- 個人の信仰を無視して、なぜ靖国神社なのか。
- 合祀した魂は一つになっているので分離できない。神を下ろすことはできない…。
- 政治家が国の安全、平和を祈願するのに、なぜ靖国神社を選ぶのか。

2. 靖国神社の起源

前身は東京招魂社(1869年創立)

招魂社…明治維新以降に国家のために殉難した死者を奉祀した各地の神社。

長州藩奇兵隊を組織した高杉晋作は、1863年、下関戦争の戦没者慰靈と、後の戦いに臨む自分たちの生前墓として、隊士共同の招魂場を設置した。

長州征討や戊辰戦争など、明治維新(倒幕)のために殉難した死者が神格化されるようになり、招魂社として各地に広がる。

1879年、東京招魂社が靖国神社となり、他は護国神社となった。命名は明治天皇。

3. 慰靈と顕彰

慰靈…死んだ人や動物の靈魂を慰めること。

忠靈…忠義のために命を落とした人の靈。英靈。

顕彰…功績を世間に明らかにし表彰すること。

(小学館『精選版日本国語大辞典』より)

慰靈塔とは、慰靈のための塔。死んだ人や動物の靈魂を慰めようとする行為のために築かれた塔であり、慰靈する側にとって必要な慰靈行為があつてこそ意味をなすものといえる。忠靈塔は、忠義のために命を落とした人の魂がまつられている塔であり、辞典には「戦死者の魂をまつた塔」とある。いったい誰への忠義で、命を落としたのは誰であるのか。

忠靈塔の起源…日露戦争の戦没兵(約8万)のうち、郷里に送還できなかつた遺骨を遼陽・旅順・安東・奉天・大連に集約し、忠靈塔とした。

4. 靖国神社の性格

戦前・戦中、一般の神社、寺院、教会などの宗教施設は文部省が管轄したが、靖国神社だけは陸軍省と海軍省の所管だった。【宗教施設ではなく軍事施設】

家内安全、安産、商売繁盛、交通安全、五穀豊穰、合格、良縁を祈願する参拝者はいない。それまでの信仰とは異なる。【国家神道＝天皇教】

墓ではないから、ここには遺体も骨もない。あるのは靈璽簿れいじほと呼ばれる名前や本籍地などが墨書きされた名簿のようなもので、これを神社本殿の背後にある靈璽簿奉安殿におさめ、ご神体として扱っている。【バーチャルな存在】

まつられているのは戦争の死者だが、民間の戦争犠牲者は含まれていない。明治維新とそれ以後、対外戦争だけでなく、戊辰戦争、西南戦争など、明治政府軍の戦死者、国家というより天皇のために命を捧げた軍人・軍属(天皇に対する忠義)にかぎられる。日本軍を皇軍と称したのも通ずる。【天皇制と一体】

遺族の意思を確認することなく合祀。【信仰の自由を侵害】

5. 靖国神社の思想と機能

思想的背景…福澤諭吉(1835～1901)の主催する『時事新報』に「戦死者の大祭典を挙行すべし」(1895年11月14日)の建白が掲載。起草者は石河幹明(1859～1943)と推定される。

戦死した兵士やその家族に対し、国からは何の恩賞も無い。今後戦争を行うためには戦死を厭わぬ兵士の調達が不可欠である。兵士やその家族を満足させるために「栄誉ある死」と称える必要がある。そのためには全国戦死者の遺族を招待し、最高司令官たる天皇自らが祭主となり、死者の功績を褒め称え、その魂を顕彰する言葉を発することが必要である。

戦死者と遺族に最高の光栄を与えることで、悲しく虚しい家族の戦死を、残された遺族の感情をむしろ喜ばしいものへと変換させ、戦死を前提とした兵士を再生産するための装置である。【追悼施設ではなく顕彰施設】

国家のために犠牲になる者がないければ、国家は次の戦争ができない。首相が靖国神社を参拝するのは、犠牲になる国民精神を日常から準備し、戦争できる国家を成立させるための政治である。

【ナショナル・ポリティックス】

東条英機らA級戦犯も合祀されている。【聖戦史観】

宮司は元自衛官。研修の場として自衛官が訪問。防衛大生有志が大学から行進。【自衛隊との一体化】

今後、戦死した自衛官をまつることを考えている。【旧日本軍の思想を継承する自衛隊】

<参考文献>

- 考えてみよう靖国問題、制作=『あんによん・サヨナラ』上映実行委員会、2006年
- 高橋哲哉、『靖国問題』、ちくま新書、2005年、ISBN 978-4-480-06232-1、880円+税
- 高橋哲哉、『国家と犠牲』、NHKブックス、2005年、ISBN 978-4-14-091036-8、920円+税
- 辻子実、『靖国の闇にようこそ：靖国神社・遊就館 非公式ガイドブック』、社会評論社、2007年、ISBN 978-4-7845-0568-5、1,800円